

乾嘉の士大夫と考證學

——袁枚、孫星衍、戴震そして章學誠——

河 田 悌 一

一つの時代には、その時代を特徴づける思想がある。十八世紀中葉でいえば、フランスでは「自己みずからの悟性を使用する勇氣をもて」とする、モンテスキュー、ルソー、ヴォルテールらの啓蒙思想が一世を風靡していたが、中國では儒家古典の一字一句に検討を加える考證學が流行した。とりわけ、清朝第六代の高宗乾隆帝、第七代仁宗嘉慶帝の治世、いわゆる乾嘉の時代は、その全盛をきわめた。

吳派の惠棟の『九經古義』、『孟子字義疏證』で知られる皖派の戴震を筆頭に、段玉裁の『說文解字注』、王念孫の『廣雅疏證』、王引之の『經義述聞』、また邵晉涵『爾雅正義』、孫星衍『尚書今古文注疏』、洪亮吉『春秋左傳詁』、盧文弨『儀禮注疏詳校』、そしてその考證學の方法論を史學に及ぼしたものとして錢大昕の『廿二史考異』、王鳴盛の『十七史商榷』、趙翼の『廿二史劄記』。さらに金石學の翁方綱、說文文字學の朱筠、十三經注疏の校勘記を書いた阮元、四庫全書の總纂官の紀昀など……。まさに中國學術史上における絢爛たる時代を劃したのである。

そしていま、こうした考證學者たちの履歷に目をやるとき、これら考證學的な學問業績をあげた人びとの多くが、惠棟と戴震を例外とするほかは、みな科擧に優秀な成績で登第し、かつ清朝のかなりの高官にたっていることに、氣づかされる。たとえば紀昀は禮部尚書・協辦大學士、王引之はおなじく禮部尚書、王鳴盛は內閣學士兼禮部侍郎、阮元は兩廣・

雲貴總督から體仁閣大學士。

しかし、こうした點からいえば、この同時代に生きた章學誠（號は實齋、一七三八～一八〇二）の生涯は、ひどく對照的であった。かれは科擧のテストにおいてきわめて鈍才であり、落第書生をつづけようやく四十一歳で進士に及第してからも、一生官につくことなく在野の人としてすごしたのである。まだほかにも、われわれはいまひとりの人物を想起起こすことができる。それは、二千年らい異端とされてきた墨子を再評價し、翁方綱（號は覃溪、一七三三～一八一八）から「名教の罪人」と呼ばれ、洪亮吉によれば章學誠と「議論の最も合わなかった」とされる、汪中（字は容甫、一七四四～一七九四）である。

かれらが在野で身を立ててゆくことができたのは、乾嘉の時代には、官途に入らずとも、各地の書院の教師、地方官の幕僚、府志や縣志といった地方志の編纂、あるいは各地の名望家の家譜の編集、さらに藏書家の司書、などの仕事に従事しながら、士大夫が生活してゆく條件が存在したからである。とりわけ経済的にめぐまれた江南では、「揚州の二馬」と稱された有名な鹽商、馬曰瑄、馬曰璐のごとく、學者、文人、畫家などインテリを援助し、書籍の出版に力を貸した人物がいたことは、よく知られている。

けれども、官につかず民間にあって客遊したかれらの生活は、みじめな、悲愴感のただようものであった。

汪中について、江藩（字は子屏、一七六一～一八三二）は『漢學師承記』卷七で、かれを追憶している。

君は一生坎坷にして不遇なり。……當世の士大夫自から風流を宏く獎むと命うは、皆な君の學を重んずるも、而もその困乏を周う能わず。於を以て世の眞龍を知る者は鮮きなり。

詩友であった黃景仁（字は仲則、一七四九～一七八三）は「著書は棟に充るも、腹は常に飢う」（『兩當軒集』卷三「偕容甫登絳雪亭」）とうたうし、べつの友洪亮吉（字は稚存、一七四六～一八〇九）はその『北江詩話』卷一で、汪中の詩を「病馬鬣を振い、時に不平を鳴らすが如し」と評している。まさに「腹の常に飢えた」「病馬」というのが、汪中にふさわしい比喩

であつたらう。

また沈元泰は『碑傳集補』卷四十七に、章學誠の生涯をこうのべている。

少くして鼻癰を患み、中年にして兩耳復た聾、老いて頭風に苦しみ、右目偏ば盲。その歿するや背の瘍を以てなり。
晩景、貧と病と交も加わり、文人の不幸を極めり。

汪中の子汪喜孫がその父の一生を追跡した『汪容甫先生年譜』、また胡適と姚名達の編集した『章實齋先生年譜』、さらにかれらの師にしてまたパトロンとしてあつた朱筠の『年譜』(姚名達編)をひもとくならば、章汪兩氏が各地の名士をたよつて流浪するさまに、それを讀むひとは、深いあわれみの情を抱かざるをえないであらう。

ところで、わたしはかつて、朱筠(號は笥河、一七二九—一七八一)を中心とした學者、思想家、文人たちの人間群像の交流に焦點をあて、當時の學問的雰圍氣を紹介したことがある。本稿は、その續篇として、乾嘉の時代に生きた士大夫たちの學術的交渉の跡をたどりつつ、かれらが考證學をどう考えていたのかということ論じてみたいとおもう。そうした作業とおして、章學誠の清代學術史における意味と位相とをみなおしてみること、それが本論のもくろみである。(なお本論では乾嘉期の社會經濟史的側面について論じる準備はない。あくまで思想學術史的側面にとどめたい。)

二

南京城内において、北門橋をわたり西にむかつて約二里ほどゆくと、小高い丘がある。その名は小倉山。その頂上に立つて、南を眺めれば雨花臺がみえるし、また西南には莫愁湖、目を轉じて北には鐘山、さらに北東にははるか明の孝陵と鶏明寺が展望される、景勝の地であつた。

袁枚(字は子才、一七一六—一七九七)は三十三歳のとき、三百金でもつてこの地をあがない、隨園となづけた。もとの所有者であつた隋氏の名にちなみ、また「その高きに隨つたために江樓を置き、その下に隨つて溪亭を置く」の園、との意

による（『小倉山房文集』卷十二「隨園記」）。

そして二年後の乾隆十七年一七五二、父をうしない喪に服した袁枚は、そのまま官途に再びもどることなく、八十二歳の死に至るまでの四十數年間、この隨園に居をすえ、當時の名公鉅卿と文酒の交わりをつづけた。七品の縣令にすぎなかったかれは、文學者としては、副宰相ともいへべき協辦大學士にして四庫全書總纂官をつとめた北京の紀昀（字は曉嵐、一七二四―一八〇五）とともに「北紀南袁」と稱され、また詩人としては、眞情の發露を主張する性靈派の重鎮の地位を占めて、趙翼（號は甌北、一七二七―一八一四）、蔣士銓（字は心餘、一七二五―一七八四）とともに、「乾隆の三大家」と稱贊されたのである。

「詩は人の性情なり」（『隨園詩話』卷六、第七十九則）とのべた袁枚は、その人生においても、人間の自然の情、いわゆる「情欲」に誠實に生きようとした人であった。食道樂をきわめて『隨園食單』を著わし、怪奇小説をものにし、纏足をきらい、「女子の才なきは便ち是れ美德なり」とする當時の女性觀に反撥して一種の女流文學を提倡、女性の門下生をあつめて詩作をおしえ、『隨園女弟子詩選』を刊行したりした。また男色を拒否することもなかったというが、これらはすべて、「情欲」を否定することなく生きようとした、かれの態度の現われだった。袁枚はいう。

貨を好み色を好むは人の欲なり。……衆人をして情欲なからしむれば、則ち人類は久しく絶ゆ。而して天下は必ずしも治まらず。聖人をして情欲なからしむれば、則ち漠として相い關せず。而して亦た肯て天下を治めず。（『小倉山房文集』卷二十二「清説」）

食通、好奇、好名、好色、そして貪欲。物質的にめぐまれた袁枚の生涯は、享樂主義的なものであった。⁽³⁾

だが情欲をあるがままに肯定して生きるという、かれの行動と主張は、必ずしも同時代の士大夫たちに好感をもつてむかえられたわけではない。いやむしろ、「その放蕩、流弊なからずんばあらず」（『清史列傳』卷七十二）といわれるごとく、批判的なものが多かったかもしれない。「三大家」として並稱された趙翼は「巴拙堂控詩」で、袁枚をつよく非難する。⁽⁴⁾

もと江寧縣に任ぜられし袁枚なるものあり。……風雅に借りて以てその貪婪を售り、鶯詠に假りて以てその饜養を恣にする。百金の贈あらば、輒ち「詩話」に登せて揄揚し、一嚮の甘を嘗えば、必ず食單を購いて仿造す。……要路の交脚と交わりを結び、虎將も亦た詩伯と稱し、良家の子女を引誘して、蛾眉は都て門生に拜す。……風流の班首と曰うと雖も、實は乃ち名教の罪人なり。

また、めぐまれぬ生活をおくった章學誠が、當時の名望家に厚く遇せられた袁枚にたいして、嫉妬の氣持を抱きつつ激しい批判の言を吐いたことは、よく知られる。「論文辨僞」「詩話」「書坊刻詩話後」「婦學」「婦學篇書後」など、げんざい『文史通義』（古籍出版社本、一九五六年十二月）に収録されている各篇には、袁枚そのひとにたいする嫌惡感が行間にあふれている。歸安の吳蘭庭に宛てた手紙（『與吳晉石簡』）に、章氏は袁枚を評している。「これ其（袁枚）の刻する所の種種の淫詞邪説は、聖言を狎侮す。經侮に附會し、以て欲を導き淫を宣すの具と爲すに至りては、罪を名教に得るなり」。

名文家をもって名を馳せた袁枚は、たのまれれば氣輕に書物の序文や墓誌、墓表の類を書き、その禮金をごくふつうに受けとつた。——弟子の李憲喬はいう、「財を好むを諱まず」、「色を好むを辭せず」と（『小倉山房詩集』題辭）。また「詩は能く人の心脾に入らば、便ち是れ佳き詩、名家老手を必せざるなり」（『隨園詩話』補遺卷二、第四十八則）とのべて、商人であれ士大夫であれ、性情をたくみに描寫した詩であれば、それを『隨園詩話』に掲載し好意的評價をあたえた。趙翼がさきに、「百金」を贈られればすぐ「詩話」に採用した、というのも、あなたがら根據なき誹謗とはいきれぬだろう。しかしながら、女弟子に詩を教授したことをもつて、趙翼が「良家の子女を引誘し、美人をみな門下生にした」といい、章學誠が「子女を蠱惑し、浮薄儇佻に競い趨き、務めて人をして禽獸の域に網せしむ」（『書坊刻詩話後』）とのべて、「名教の罪人」とまで呼ぶのは、あまりにも道學者的な狹隘な見方ではなからうか。

しかし袁枚にたいする章學誠や趙翼の批判のことばから、かれらがきわめて儒教の三綱五常的な名教倫理をその思想の根柢にもつていたということも、逆に讀みとることができるのである。

ところで、そうした袁枚のひとりとなり人格を否定せず、むしろ好意的に見、稱賛するものも、もちろん数多くいた。アーサー・ウェイリーは、袁枚を「愛すべき、機知にとんだ、度量のある、慈悲深い、(それでいて)短氣な、ひどく反感をもたれる人聞だ」とその評傳 Arthur Waley, *Yuan Mei—Eighteenth Century Chinese Poet*, London, 1956 の序文でのべているが、わたしも袁枚は「度量ある」そして「慈悲深い」人物であった、とおもう。乾隆四十九年六月、舊友の程晉芳、字は魚門、號は菘園——袁枚はその「祖父は新安の鹽商」という——が、陝西巡撫の任にあった畢沅(號は秋帆、一七三〇—一七九七)を訪れる途中、暑さのため西安で客死したおり、五千金の借金をなきことにして、「(君の座主であった)朱竹君(筠)先生死してより士の談ずる處なく、(君)魚門先生死してより士の走く處なし」と京師の士大夫たちは語っている、という情誼にあふれた「墓志銘」を書いていることは、その一例にすぎぬだろう(『小倉山房文集』卷二十六)。

袁枚は才能ある士人を愛し、經濟的な後楯となり、文壇に紹介し、かれらをはぐくみ育てている。そうした袁氏にたいして、感謝の念を抱く一群の人びとが存在したのは事實である。

たとえば、洪亮吉は乾隆五十一年、とし四十一歳にして進士に、まだ科第できず、鬱々たる想いに身をこがしていた。が、袁枚はその洪亮吉の著『卷施閣文甲集』のために「君は漢魏六朝の文に善たみなり。一篇出づる毎に、世争いてこれを傳う」という序文を冠している。それから八年後、洪亮吉は、第一甲第二名という拔群の成績で登第、翰林院編修をへたのち視學として遠く貴州の地にあつた。望舊の念にとらわれたかれは、錢大昕、畢沅、王昶、盧文昭、邵晉涵、汪中、孫星衍ら二十四人の師友のことを想い起こしつつ「歲暮、人を懷う二十四首」の七律を作った(『卷施閣詩』卷十五)。そしてその第一首を七十九歳にしていまだ健康なる袁枚にささげている。「袁太令枚」と題するその詩において、洪亮吉は袁枚の人生を、肯定的にうたいあげる。

清福能消四十年

清福に能く消すこと四十年

老來仍作地行仙

老い來りて仍お作る地行の仙

居然手筆空千古

居然として手筆は千古空しうし

隨分頭銜寫一編

分に隨がうの頭銜もて一編を寫す

公頭銜或書庶吉士或書江南知縣

公は頭銜、或いは庶吉士と書き、或いは江南知縣と書き、

或書陝西候補知縣不拘一例

或いは陝西候補知縣と書く、一例に拘せず。

名士竟須依作主

名士は竟に須らく依りて主と作すべく

美人聞已放歸禪

美人は聞く已に放たれ禪に歸す

存亡舊例都參破

存亡の舊例は都て參破り

生輓詩鈔萬口傳

生きて輓らうの詩鈔は萬口傳う

二句目の「地行の仙」、地をゆく仙人とはすなわち長壽を祝する語、蘇軾の詩にみえる。また六句目にうたうところは、袁枚の美人の女弟子が禪門に入ったとのエピソード。八句目の「生輓詩鈔」とは、陶淵明の故事にならって袁枚が自分自身で輓詩（おとむらいの詩）を作ったことをいう。ことがらは錢大昕への手紙、『隨園尺牘』卷七「答錢竹初」に詳しい。

また洪亮吉とおなじ陽湖の出身で、「孫洪二君」と並び稱された孫星衍（號は淵如、一七五三—一八一八）は、「隨園に遊びて袁太史に贈る七首」〔孫淵如先生全集〕所收『冶城遺集』の第五首に、袁枚を稱賛しながらも、屈折した想いをことうたう。

等身詩卷著初成

等身の詩卷 著初めて成り

絕地天通寫性靈

地天の通を絶して性靈を寫す

我媿千秋無第一

我れ媿^はず 千秋に第一なきを

避公才筆去研經

公の才筆を避け去りて經^{おき}を研む

だがこの孫星衍の詩の背景には、以下のような事情があつたのである。すなわち二十年前、孫星衍が袁枚に詩をおくつたところ、袁枚はその詩に目をとめ、「奇才の目あり」と稱贊、かゝる詩人として世に送り出したのであつた。なぜなら、

天下に清才は多けれど、奇才(天才)は少なし。⁽⁶⁾

けれども詩中にもこのべるとおり、孫星衍は「千秋に第一なきを媿じ」て、つまり千年たつたとしても、詩作では第一人者になれはしないし、袁枚先生の詩の「才筆」にはとてもかなわない、と恐れをなしたのだった。そこで、詩人として名をあげることを斷念、經書の研究すなわち考證學に自からの進むべき道をさがしもとめた、というのである。

四

しかるに袁枚は、爾來、考證學者として業績をつみ名聲を博していた孫星衍にたいして、「詩をすてて考證を好み」てより「才は奇ならず」——と、苦言を呈したのである(孫星衍「隨園隨筆序」など)。詩をとるべきか、考證をとるべきか。袁枚は、考證學は詩作に害あり、と考へ、考證學をすてるよう示唆した。

それだけではない。これよりさき、袁枚は

形上これを道と謂う、著作これなり、形下これを器と謂う、考據これなり。

と、繫辭傳を援用しつつ、著作こそが第一義的なもの、考據は第二義的なものにすぎぬ、とする見解を主張したのだった。「隨園隨筆自序」の冒頭にいう、「著作の文は形而上、考據の學は形而下、各おの資性あるも、兩者は斷じて兼ねる能わず」と。

おなじ内容のことを程晉芳への書簡「與程菴園書」(『小倉山房文集』卷三十)には、「古文の道は形而上、純に補を以て行わる。多くの書を読むと雖も、妄りに摭拾あるを得ず。韓(愈)柳(宗元)言う所の功これを盡すが若し。考據の學は形而下、専ら載籍を引き、博にあらざれば詳しからず、雜にあらざれば備わらず。辭達するのみ。文を爲す所なくんば、更に古を爲す所なきなり」。また惠棟への書簡「答定宇第二書」(『小倉山房文集』卷十八)にも似た言及がある。「漢の王充曰く、著作は文儒たり、傳經は世儒たり、と。著作は業を以て自から顯らかにし、傳經は人に因りて以て顯らかにす。是れ文儒優ると爲す」。

こうした袁枚の考證學輕視にたいして、孫星衍は、手紙「袁簡齋前輩に答える書」(『問字堂集』卷四)を書いて、反論を加える。

小生は閣下の意を推測いたしますに、蓋し故實を撫ないあつめることが考據であり、性靈を抒まべ寫すことが著作だ、とだけお考えのようです。しかし(それは)經にたいする「道」と「器」ではありません。「道」とは「陰陽柔剛仁義の道」をいうのであり、「器」とは「卦爻象象載道の文」をいうのであって、著作もまた「器」なのであります。

さらに反論に以下のようにつづく。「侍われ少せうきより書を読み、訓詁の學を爲す。以もて爲ならなく、經義は文字より生じ、文字は六書に本づく。六書は當にこれを篆籀古文に求めて、始めて倉頡爾雅の本旨を知るべしと。是において、鐘鼎款識及び漢人の小學の書を博く稽たみ九經三史の疑義、得て釋くべし。壯さになるに及びて、稍やや經術に通じ、又た聖人制作の意を知らんと欲す。以もて爲ならなく、儒者の身を立て政に出づるは、皆な天に則り地に法る、と。是において周天日月の度、明堂井田の法、陰陽五行、推十合一の數を考え、而る後に人の萬物より貴きこと、及び儒者の學の諸子百家より貴き所以を知る。未だ遽たかに貫串する能わずと雖も、然れども心竊ひそかにこれを好む。此れ則ち侍われ器に因りて道を求め、下よりして上達の學なり。閣下は奈何ぞ道と器とを分けて二と爲すや。……古人は考據を重んずること、著作を重んずるより甚し。又た分けて二と爲さず」。

孫星衍は、安易に形而上、形而下、道器の説でもって、著作と考證に優劣をつけることに異議をのべ、考證こそが著作より重要なのであり、また考證によつてこそ聖人の意を知ることができる、と主張する。と同時に自分が考證學を「心ひそかに好んでいる」ことを、はっきり宣言しているのである。

この孫星衍の反論にたいして、袁枚は自分より三十七歳も若い孫氏に返事「答孫淵如觀察」(『隨園尺牘』卷九及び『問字堂集』卷四)を出して、そう事をあらだてにくいつくな、という主旨をのべる。すなわち、友情をまっとうするためには、論争になるようなことには觸れないのが一番よいのだ。かつて溫公(司馬光)と蜀公(范鎮)とは、終身、樂律のことについて論じなかつたし、考亭(朱子)と東萊(呂祖謙)とはお互いに詩疏のことを話題にはしなかつた。わたしは夢樓(王文治)や姬傳(姚鼐)と、いまにいたるまで禪と地理の二つのことについて、論じたことがない。なぜなら、これらはみな「君全子の交」つまり友情交誼をまっとうするためだ。だから、二人の友情のために、考證學云云についてはもはや論じないでおこう——というのである。

だがやはり、袁枚は一言こういわざるをえなかつた、「近日、足下の詩の文を見るに、才は竟に奇ならず、咎を考據に歸せざるを得ず」と。

そしてさらにことばを續ける。「老人には『隨園隨筆』(のち孫星衍、序文を贈る)三十卷あり。五十年來、書を見ること甚だ多く、省記せざるに苦しむに因りて、その新奇にして喜ぶべきものを選び、隨時摘録し、終に考據に類するものあるも、自家の爲めの遺忘に備え、談鋒に資するにすぎざるのみ。わたしにも考證に類するものはあるが、それは單なる備忘録、話のタネにすぎぬ、というのであつた。

さらに「寄奇方伯」(『隨園尺牘』卷七)では、「考史證經(考證學)は都て故紙の堆の中から得たもの」であつて、「天生の笨伯がこれによつて拙さを藏し消聞とするならそれでもよいが、有識の人が斷じて爲すべきことではない」とまで言いきる。袁枚にとつて考證學は、このようなものとして、存在したのである。

五

ではいったい、清朝の學術の極盛期とされる乾嘉の士大夫たちは、學問としての考證學をどう考えていたのだろうか。「凡そ古ならば必ず眞、凡そ漢なれば皆な好し」という有名な梁啓超の評語で知られる、吳派の巨頭・惠棟（字は定宇、一六九七—一七五八）のばあいは、どうか。惠周惕、惠士奇という碩學を祖父と父にもち、袁枚より十九歳の年長者であった惠棟は、代々、蘇州に居をかまえていた。蘇州から運河を水行すると、無錫、常州、鎮江をへて、袁枚の住む南京まで約二百キロの道のり。両者は氣嫌ねなく書簡のやりとりをし、詩會をともに楽しむ親しい友人でもあった。そうした交情のなかで惠棟は、先輩の學者として、かつて袁枚に考證學をやるように、と求めたことがあった。だが、袁枚はそれを辭退して、こう答えている（『小倉山房文集』卷十八「與惠定宇書」）。

夫れ人には各おの、能くすると能くせざるとあり。性にも亦た近きと近からざるとあり。孔子は顔（淵）・閔（子騫）に強うるに文學を以てせず。而るに足下は乃ち僕に強うるに經を説くを以てす。倘し僕己れを知り彼れを知る能わず、而して亦た有を以て無に易うるの請を爲さば、吾子それ能く學ぶ所を舍てて相い従うや否や。

この袁枚の考證學を拒否する手紙にたいして、惠棟がどう返答したか、いまわたしにはわからない。しかし惠棟は、易、詩、三禮、春秋三傳および論語という十種類の經書を研究した『九經古義』の「述首」に、みずからの信念を、つぎのようにのべている。

漢人の通經には家法あり。故に五經師あり。訓詁の學は皆な師の口授する所にして、その後乃ち竹帛に著す。所以に漢の經師の説は學官に立ち、經と並び行わる。五經、屋壁より出でて、古字古音多し、經師に非れば辨ずる能わず。經の義は訓に存し、字を識り音を審らかにして乃ちその義を知る。是の故に古訓改むべからざるなり、經師は廢すべからざるなり。余が家は四世、經を傳えて咸みな古義に通ず。

この主張は、かれの父惠士奇が「禮經は屋壁より出でて古字古音多し。經の義は訓に存し、字を識り音を審らかにして、乃ちその義を知る。故に古訓改むべからず」(『清儒學案』卷四十三)とのべた、家傳の教えを繼承するものであった。そしてここには、以下のような意識があった。それはすなわち、閻若璩の『古文尚書疏證』によって、これまで神聖にして犯すべからざるものと目されてきた儒教經典(とくに孔子の舊居の「屋壁」から發見されたという古文で書かれた尚書)が後世の僞作だ、と斷定されたために、經書のテキストにたいする疑惑が生まれ、すべての經書はそれが書かれた時代に還元し、當時の「字音」に即して解釋しよう——という意識である。

と同時に、つぎの三つのことが、そこから認識されるであろう。

第一に、宋儒のごとき經書の字音を無視した、恣意的にして主觀的な經典解釋は否定すべきこと。

第二に、「經の義」つまり經書の教義、哲學は、その正しい訓みのなかに存在するのだということ。

さらに第三は、正しい訓みは漢代に通用していた字音でもって經書を解釋した、最古の注である漢代の「經師」(漢儒)の説こそが尊重されるべきであり、したがって漢儒の説を復元し研究する考證の學こそが經學に最重要だ、ということ。

そして、このような認識こそは、惠棟の學問的實踐によって、當時の學界に定着させられたのである。惠棟の三十一歳若い弟子にして、「忘年の交わり」をなした錢大昕(字は曉徵、一七二八—一八〇四)が、惠氏の『古文尚書考』の序文(『潛研堂文集』卷二十四)に、「今の士大夫、多く漢學を尊崇するは、實に(惠棟)先生の緒論に出づ」と書き、王昶が惠氏の「墓志銘」(『春融堂集』卷五十五)に「海内の人士、經に通するを重んぜざるはなく、古を信ずるを知らざるはなし、而してその端は(惠棟)先生これを發す」と書くとおりである。

こう書いた錢大昕はといえば、惠棟なきあとの學界で吳派の大立物となつた學者である。かれは「先聖の蘊は六經に具われり。六經を捨てて、安んぞ學あらんや」(『潛研堂文集』卷二十六「味經窩類稿序」)とのべて、經書と經學にたいする滿腔の信賴を語っている。がしかし、考證學の方法を經學のみに限定することなく、小學、天文、數學、音韻、地理、金石な

どあらゆる學問領域に、それをもちいたのだった。——江藩『漢學師承記』卷三に云わく「(錢大昕)先生は一經を專治せずして經に通ぜざるはなく、一藝を專攻せずして藝に精ならざるはなし」と。

とくに、若年にして十七史すべてを誦んじたといわれる錢氏は、歴史學の分野に考證學を活用し「清朝史學の第一人者」となった。「方今、學博くして行ない醇きは、蓋し未だ閣下の右に出づる者なし」(盧文弨『抱經堂文集』卷十九「答錢辛楣書」と評されたかれは、多くの書物の序文を執筆しているが、そこにはかれの考證學觀が率直に表明されている。

たとえば臧玉林的『經義雜識』の序(『潛研堂文集』卷二十四)にいう。

六經とは聖人の言なり。その言に因りて以てその義を求むるは、則ち必ず詁訓より始めん。詁訓の外に別に義理ありと謂うは、桑門の不立文字を最上乘と爲すが如くして、吾が儒の學にはあらざるなり。詁訓は必ず漢儒に依らん。その古を去ること未だ遠からざるを以て、家法相い承け、七十子の大義、猶お存する者ありて、後人の知らずして作すとは異ればなり。

ほぼ同様の主張は「左氏傳古注輯存序」(『潛研堂文集』卷二十四)にもみえる。「それ經を窮むる者は必ず訓詁に通ず。訓詁明らかにして、而る後に義理の趣を知る。後儒は訓詁を知らずして、鄉壁虛造の説を以て義理の存する所を求めんと欲す。それはを以て支離にしてその宗を失う。漢の經師は、その訓詁に皆な家法あり、その聖人を去ること未だ遠からざるを以てなり。魏晉(以)降、儒生は異を好み新を求めて注解日に多く、而して經は益ます晦し」。

これら錢大昕のことばには、惠棟とおなじく、聖人の時代からあまり時間が経過しておらず、「家法」すなわち學派、スタイルとしての教えの繼承關係が明確な、「漢の經師」にたいする尊敬の氣持が、みられる。とすれば、錢大昕の考證學觀は「經籍叢書序」(『潛研堂文集』卷二十四)の冒頭にみえる、つぎの語につきるであろう。

文字ありて而る後に詁訓あり。詁訓ありて而る後に義理あり。訓詁は義理のよりて出づる所、別に義理の訓詁の外に出づる者あるにあらざるなり。

錢大昕にとっては、訓詁すなわち考證學のなかにこそ哲學が存在しているのであった。

ところで錢大昕を引けば、いまひとり錢氏と同じ江蘇省嘉定縣の出身にして同年の進士、また義兄（錢大昕の妻王順英の兄）、しかも學問上のライバルでもあった王鳴盛（號は西莊、一七二二—一七九七）の主張にも、耳をかさねばならぬだろう。

王鳴盛は青年時代、嘉定から西に五十キロの蘇州で紫陽書院に在學した。かれはそこで、時の「山長」すなわち院長であつた沈德潛（號は歸愚、一六七三—一七六九）に格調派の詩を學び、沈氏の編集した『江左七子詩選』に、錢大昕、王昶などとともに、その詩が収録された才子であつた。が、かれは、詩人として立つことをいさぎよしとせず、經學考證學者としての名聲をのぞんだ。事情はのちの孫星衍と同様である。ちょうど蘇州には考證學を學ぶべき師がいた。ほかでもない惠棟である。友人の王昶（號は蘭泉、一七二五—一八〇七）は「蒲褐山房詩話」（『湖海詩傳』卷十六）にいう、「（王鳴盛は）先時、惠松厓（棟）と交わり、深く羣經古義を究め、『尙書後案』及び軍賦考（『周禮軍賦說』）を著わすは、皆な鄭（玄）君の説を闡發す」と。錢大昕も王鳴盛の「墓志銘」にいう、「惠徵君松厓と與に經義を講じ、訓詁は必ず漢儒を以て宗と爲すを知る」と。まさしく王鳴盛は、惠棟の學統をひく弟子、吳派の有力なメンバーとして存在したのである。

王鳴盛じしんは、乾隆六十年（一七九五）乙卯の春、ときに年七十四歳まさに死の二年前であつたが、自分とおなじように詩作で立つことを斷念し考證學者となつた孫星衍のために、袁枚への反論を收めた孫氏の著『問字堂集』への序文をしたため、次のようにのべている。

それ學は必ず經に通ずるを以て要と爲す、經に通ずるには必ず字を識るを以て基と爲す。故の明の士は經に通じざるによりて、書を讀むこと皆な亂讀、學術の敗壞極まれり。又た何の文かこれ言うに足らんや。天運循環し、本朝蔚興す。百數十年來、顧寧人（炎武）、閻百詩（若璩）、萬季野（斯同）、惠定宇（棟）、名儒踵を相い接す。而して尤も幸いなるは『説文』の巋然として獨り存し、學者をして據依する所を得て、以て經に通ずるの本務と爲さしむることなり。孫君は最も後に出でて、精は八極に驚せ、思いに耽り旁く訊う。問う所は一師にあらざるも、而して總じて始めを字

を識るに託す。

王鳴盛はここに、孫星衍は特定の師匠、「一師」についたわけではないけれど、「字を識る」ことに學問の基礎をおいたという事實によって、惠棟の學の流れをくむ最後の人だ、と評價したのであった。

六

以上、吳派の三人の學者の考證學についての意見をかいまみた。そこには、かれらに共通するいくつの特徴が感得されたであろう。なかでもいちばん特徴的であったのは、かれらが、漢儒の説を古いがゆえに尊いと考え、その説を無條件に正しいとする認識である。たとえば王鳴盛は、その著『西莊始存稿』卷十五に収録する余蕭客(字は古農、一七三二—七七八)の「古經解鈎沈」への序文で、以下のようなエピソードを紹介している。⁽⁷⁾

「わたし(王鳴盛)は、天下の士と交わって、經に通じている二人の學者を得ることができた。吳郡の惠定宇と歙州の戴東原とである。さいきん、その東原とくつろいで語り合った。

「君の學問と定宇の學問とは、どうか」

東原は言った。「同じではない。定宇の學問は、古を求めるものであるし、わたしのそれは、是ただしきを求めるものである」
 ああ！ 東原は自分では、同じではない、と言っているが、考えてみれば、古を求めるということは、即ちとりもなおさず、是を求めるということだ。

古を捨てて是などというものは、ないのである。》

この短い問答のうちには、吳派の考證學と皖派のそれとの違いが、きわめて象徴的に語られているようにおもわれる。すなわち、王鳴盛は、古を追求することこそが是(眞理)を追求すること、つまり「求古」と「求是」とをイコールでつなぎ、兩者を等しいもの——とみているのである。それに反して、戴震は、「求是」のみをいう。「求是」と「求古」を等

價值にはみていない。戴震は、無言のうちに、「求古」を追求するあまり無條件で漢儒の説に盲従することを拒否する。漢儒の説であっても取捨選擇する見識の必要性を、王鳴盛に示唆しているのである。(8)

とすれば戴震(字は東原、一七二三〜一七七七)の考える學問とは、そして考證學とは、いったいかなるものであろうか。戴震といえは必ず引かれる一節がある。乾隆十八年一七五三、戴氏三十一歳のときは鏡に宛てた手紙「與是仲明論學書」(『戴震文集』卷九)である。そこにはこうある。

經の至れるものは道なり、道を明らかにする所以のものは詞なり、詞を成す所以のものは字なり。字よりして以てその詞に通じ、詞よりして以てその道に通ずれば必ず漸あり。

ほほおなじことは、十六年後の乾隆三十四年一七六九、四十七歳のとき書いた、やはり余蕭客の「古經解鈎沈」のための序文(『戴震文集』卷十)にも見える。「經の至れるものは道なり、道を明らかにする所以のものはその詞なり。詞を成す所以のものは未だ小學・文字より外に能くするものあらざるなり。文字よりして以て語言に通じ、語言よりして以て聖賢の心志に通ず」。

ここには、文字によって構成される言語(詞)、その言語によって論じられる經書の究極の道つまり聖人の心へと、演繹的に順を追って追求してゆく明晰な認識の過程が語られる。とともに、戴震の考證學が古代の文字言語の研究(小學)へと進んでゆく可能性もよく理解される。そうした方面の戴震の考えをより一步推し進め、『說文解字』に注釋をつけた弟子の段玉裁(字は若膺、一七三五〜一八一五)は、のべている。「小學には形あり、音あり、義あり。三者は互いに相い求め、一を擧げればその二を得るべし。古の形あり、今の形あり。古の音あり、今の音あり。古の義あり、今の義あり。六者は互いに相い求め、一を擧げれば、その五を得べし。……聖人の字を制るには、義ありて而る後に音あり。音ありて而る後に形あり。學者の字を考えるは、形に因りて以てその音を得、音に因りてその義を得るなり」(『經韻樓集』卷八「王懷祖廣雅注序」)。

だが戴震はただ考證學のみに精力をついやして、こと足れり、とする學者では終わらなかつた。かれにとって考證學だけが學問ではなかつたのである。乾隆二十年一七五五、三十三歳のとき、清代學術史における一つの重要な、畫期的見解を提出したのである。

古今學問の途は、その大致三あり。或るものは理義を事とし、或るものは制數(考證)を事とし、或るものは文章を事とす。文章を事とするは、等して末なるものなり。……聖人の道は六經に在り。漢儒はその制數を得たるもその義理を失なう。宋儒はその義理を得たるもその制數を失なう。(『戴震文集』卷九「與方希原書」)

戴震はこの文章において、清代の學者としてはじめて、學問を義理、考證(制數)、辭章(文章)という三つの要素に分類したのである。かれはこの三者を、學問という鼎を支える三本の足とみる。そしてもし、この三者に強いて序列をつけるとすれば、文章が末だ、と(この時點では)いう。のみならず、吳派の考證學者たちが尊崇してやまなかつた漢儒にたいして、かれらは考證の學では成果をあげたが義理の學つまり哲學では駄目であつた、と評する。そして返す刀で、宋儒、朱子學にたいして、義理では成果あるも考證は駄目だ、と切りする。

しかしながら、戴震の提出した義理、考證、辭章という學問の三要素は、かれの生涯において、一定不變のものとして存在したわけではなかつた。すでに余英時教授がその著『戴震と章學誠を論ず』で詳細に分析したごとく、ある時期は義理が重要視されまたある時期は考證が重要視される、といった具合に、時代によつて變化をみせるのであつた。⁽⁹⁾

この「方希原に與うる書」が執筆された八年後の乾隆二十八年夏、二十九歳であつた段玉裁は戴震——ときに四十一歳、この春、北京で會試を受験するも及第せず——に弟子の禮をとつたが、このころ戴震は、

天下に義理の源あり、考覈(考證)の源あり、文章の源あり、吾れ三者において皆なその源を得んことを庶^{こいね}がう。

とのべて、この三者を等價值にみると同時に、それぞれの源という三者に共通した何か究極的なものが存在するかのよう
に考えていたようだ、と段玉裁はその印象を記録している(段玉裁『戴東原先生年譜』五十五歳の條)。

しかしこの二年後、戴震は（すでに七年前に逝世した）惠棟のために書いた題字「題惠定字先生授經圖」（『戴震文集』巻十）には、すこし趣きを異にした見解をのべている。

△論者はいつも「漢儒の經學あり。宋儒の經學あり。前者は訓詁を主とし、後者は義理を主とする」と言う。

だが、これは私にとって實に不可解なことだ。そもそもいわゆる義理が、もし經を捨てて空しく胸臆にたよることができないのなら、それは人びとに空を鑿^うちてこれ得させようとするようなもので、どうして經學などといえようか。ただ空しく胸臆にたよっていたのでは、結局、聖人賢者の義理をさぐることはできないのだ。そこで古の經書にそれを求めることになる。だが、古の經書に求めんとしても、遺文は斷絶し、古今は隔離してしまっている。そこで訓詁に求めるのだ。訓詁が明らかになって、はじめて古の經も明らかになり、古の經が明らかになって、はじめて聖人賢者の義理も明らかになるのである。……

聖人賢者の義理とは、ほかでもない、典章制度に存在しているものなのだ。惠松厓先生は、經を爲^{おさ}めるために學者が漢の經師の訓詁を事とし、三古（上古・中古・下古）の典章制度を博く稽み、それによって義理を求め、依據すべき確實なものがあるよう、希望された。

かの論者は、訓詁と義理とを二つに分けている。が、これでは義理が明らかにならず、訓詁もいったい何の役に立とう。義理が典章制度に存在しなければ、いきおい異學曲説に流れてしまつて自分では氣がつかない。これではまた、先生の教えから遠ざかつてしまふことになる。△

すなわちここでは、考證の學を主とし、義理の學を従とする、立場に立って、漢儒のごとく訓詁考證につとめれば、おのずから聖人賢者の教えが明確になる、と戴震はいうのである。だが章學誠は戴震の學問の偉大さをみとめつつも、「心術正しからず」とのべて、戴氏の言は「人に因り、地に因り、時に因りて、各おの變化あり」で、名望家や權勢あるものなたいしてはあえて異を唱えなかつた——と批難している（『文史通義』補遺續「答邵二雲書」）。まさしく戴震の言は、それ

がいつ、どこで、どのような場合に發せられたか、ということに注意しなければならないのである。とすれば、この惠棟への題字の言も、必ずしも額面通りにうけとるわけにはいかぬだろう。やはり吳派の大家惠棟の考證學への贊美、いやそれよりも當時の學界に勢力をもっていた惠棟の弟子たち、錢大昕や王鳴盛などにたいする遠慮、といった點をさし引いて讀む必要があるだろう。ましてこの時、戴震はまだ進士に及第せず浪人の身の上であつたのだから。

段玉裁は、さきほど引用した『戴東原先生年譜』五十五歳の條のあとに、つづけてこういつている。「のち數年して又た(戴東原先生)曰わく、義理は即ち考覈、文章二者の源たり。義理は又た何の源かあらん。吾が前言過までり、と」。

考證學が主要だと主張する、惠棟への「題字」は、戴震の一時のよろめきの文章であつたのかもされない。

段玉裁は、さらにまた、戴震死して十五年後の乾隆五十七年(一七九二)六月、臧庸、顧明らに委托されて十二卷の『戴東原先生文集』を増編したが、段氏はその「序文」につきのように記している。

始め玉裁、先生の緒論を聞く、その言に曰わく、「義理の學あり、文章の學あり、考覈の學あり。義理は文章、考覈の源なり。義理に熟して而る後に考覈を能くし、文章を能くす」と。……

先生の言に(また)曰わく、「六書九數等の事は、輻夫(かちや)の如く然り。輻中の人を昇(か)ぐ所以なり。六書九數等の事を以て我れに盡くすは、是れ猶お輻夫を誤認して輻中の人と爲すが如きなり」と。

みられるごとく、段玉裁は、戴震は生前に義理こそが考證や文章よりも重要なものだとみなしていた、と強く主張するとともに、戴震の學問の價值はその義の學にあつた、と力説するのである。

戴震を義理の學者つまり哲學者とみるのは、段玉裁ひとりだけではない。段玉裁の一世代あとの學者、『孟子正義』の著者である焦循(字は理堂、一七六三—一八二〇)もまた、戴震の義理の學を高く評價する。焦循が戴震を顯彰した文章「申戴」(『雕孤集』卷七)には、戴震がその臨終にあたってのべたという、さわめて興味深いことが引かれている。すなわち、戴震はその死に際して、

生平の讀書は絶えて復た記せず、此に到りて方はじて知る。義理の學は以て心を養うべきを。
と、のべたといふのである。⁽¹⁰⁾

人のまさに死なんとするや、その言よし。皖派の考證學者として稱贊された戴震ではあつたが、かれ自身は考證學の全盛期において、義理の學をみずからの窮極の目標としてその生に終止符をうったのである。

七

しかしながら戴震の學問における、こうした義理の學の重要性は、同時代の士大夫たちからは重視されなかつた。否むしる否定的にみなされた。戴震が五十五歳という、當時の學者としては比較的若くで没したのち、弟子の洪榜はその「行狀」をつくり、義理の學を論じた書簡「彭進士尺木に與うる書」をその行狀に収録した。だが戴震の有力な後楯バトロンのであつた朱筠は、その書簡の収録につよく反對し、

必ずしも載せずして可なり。戴氏の傳うべきものは、此にはあらず。

とのべたのだつた。戴震の子、戴中立はその朱筠の言を拜して、性と天道を論じたその書簡を削除したといふ（『漢學師承記』卷六）。

それによつて章學誠は、「心術正しからず」と戴震を批難しながらも、乾隆三十一年一七六六、二十九歳のとき北京で四十四歳の戴氏と面談していらひ、一貫してかれを自分の最大のライバルとみなしていた。なぜなら、戴震こそ考證學の時代における哲學者——義理の學の追求者、と評價したからである。章學誠は、當時の學界で重望をになつていた朱筠や錢大昕たちが、戴震を厚く尊重していたことは認める。しかしかれらは、「訓詁名物、六書九數に用功深細なり」とのべて、ただ考證學者としてのみの戴氏を評價するにとどまり、『原善』などの義理を論じた著作にたいしては「精神を無用の地に用う」と否定的にみている、と章學誠は大いなる不満を抱く。すなわち、哲學者としての戴震を朱筠、錢大昕は正

當に評價せぬ、と残念がるのである。そして章學誠は憤慨し「朱筠先生の前で力爭し」戴震への認識を改めるよう訴えた。だが朱筠先生はもちろん、當座の人びとの評價認識を變えることはできなかった。——このように、章學誠はその唯一の友部晉涵への手紙で、考證學萬能の風に染まった士大夫たちの頑迷さをなげいている（『文史通義』外篇三「答邵二雲書」）。とするならば、「六經皆史」を唱え獨得の歴史哲學をといたことされる章學誠こそは、考證學全盛期において、考證學に反旗をひるがえした思想家であった、といえるのか。死後三十一年目にしようやく出版されたかれの主著『文史通義』には、當時の考證學者への罵詈雑言がみちみちている。

「今の學者は以謂らく、天下の道は名數の異同を較量し、音訓の當否を辨別するに在り、斯くの如きのみ、と。是れ何ぞ坐井の天を觀、拗堂の水を測りて、而も遂に六合の運度を窮め、四海の波濤を量らんと欲し、盡すべしと以謂に異らんや」（『文史通義』内篇四「答客問下」）。

「近日、考證の學は、正にその義を求めざることを患う。形迹の末を執り、銖黍較量して小しく同異あらば、即ち囂然として紛爭す。……今の自から命けて考訂と爲して好んで無益の名數を争う者は、率ね皆な鐘律を知らずして漆色畫文を修言する者なり」（同外篇二「說文字原課本書後」）。

「訓詁注疏は經を釋する所以なるも、俗儒は反て訓詁注疏に溺れ、經の旨を晦くするなり」（同内篇二「書教下」）。

これらの文章にみられるのは、學問の本旨を見失ない、瑣細な事實の考證に汲々とする當時の考證學者にたいする輕蔑と憐憫の情であらう。

けれども、章學誠は考證學そのものを輕視したり否定したりしたわけでは、けっしてない。かれの批判はあくまでも「俗儒」すなわち一流の考證學者にたいして向けられている。なぜなら、「今の學者、……天質の近づく所を問わず、心性の安んずる所を求めず、惟だ風氣の趨く所を逐い、當世の尙ぶ所に徇いて、勉強してこれを爲す」（同外篇三「答沈楓堦論學」）がためである。つまり、自分自身の素質、向き不向きを考えず、考證學が時代のはやりだからといって猫も杓子も考

證學をやる、というような風潮をいましめ攻撃しているのである。

章學誠の批判をすこし詳細によめば、かれが考證學それ自體を否定しているのではないことは、明らかであろう。いやむしろ、考證學は學問をささえ、そして學問を構成する重要な要素だ、と肯定していることに氣がつこう。

師朱筠の次子である朱錫庚、字は少白、への書簡(『章氏遺書』卷二十九「與朱少白書」)には、

近日、學者は多く攷訂を以て功と爲す。攷訂は誠に學問の要務なり。

と、のべて、考證學の價値をみとめる發言をしている。と同時に風氣に便乘して考證學に偏重しすぎることをいましめ、義理の學と辭章の學にたいしても目を向け、力を入れるようによびかける。さきの文章は以下のようにつづく。「然れども、(今の學者は)義理において甚しくは精を求めず、文辭は置きて講ぜず。天質には優あり劣あり。成る所は能く偏する無くんば可なり。紛(紛)として風氣に趨り、相い與に義理を貶して文辭を薄くするは、是れ一時の名に徇うを知りて、三者は皆な道を分かつことを知らず。環生は送いに運り、衰盛は相い傾き、未だ卓然として能く自立するを見ざるなり」。ここには學問を形成するものとして、義理、考證、辭章という三者が論じられている。まさしく章學誠は、さきに戴震がはじめて主張した學問の三要素を援用しているのである。

とすれば、「それ稍や通方の者は、則ち考訂、義理、文辭を三家と爲し、各おのその長ずる所ありと謂う、而れども此れ皆な道中の一事なるを知らざるのみ。著述紛紛として、出づるは(これを)奴とし、入るは(これを)主とするは(出奴入主)、正しく此れに坐す」(『文史通義』外篇三「與陳鑑亭論學」)とのべるのは、おそらく戴震かあるいは姚鼐か、を意識して吐かれたことばであろう。義理、考證、辭章の三分類法は、戴震以後、姚鼐(字は姬傳、一七三一—一八一五)が、「鼐嘗て論ず、學問の事には三端あり、と。曰わく義理なり、考證なり、文章なり、是の三者、苟しくも善くこれを用うれば、則ち皆な以て相い濟くるに足る。苟しくも善くこれを用いざれば、則ち或いは相い害うに至らん」(『惜抱軒文集』卷四「述庵文鈔序」)とのべたことによつて、桐城派の人びとの間で有名になったからである。

前引の高郵の沈在廷への返書「答沈楓墀論學」(『文史通義』外篇三)には、義理、考證、辭章にかんする、章學誠のもう少し詳しい議論がみられる。かれはいう。

△流行がこしらえたもので言えば、考訂、詞章、義理。各人がそなえているもので言えば、才、學、識。童蒙こどもの知恵の段階で言えば、記性、作性、悟性。孝訂は學を重視し、辭章は才を重視し、義理は識を重視する。(だから)人は當然みずからが長ずるものをやるべきだ。記性が蓄積されて學となり、作性が擴大されて才となり、悟性が達成されて識となる。(とすれば)童蒙といえども徳に入ることができるのであって、この道に到達するのは遠いことではないのがわかるだろう。……………

そもそも考訂、辭章、義理と三つに分類されてはいるが、大要は二つだ。つまり學と文なのである。だから理はむなく立つものではない。當然、學と文との二者の間に存在するものだ。學は博覽に依據し(學者としての)、閱歴キョリキを必須のものとするし、文は新たな發明を貴び世に役立つことを期待する。このような人であってこそ道をともに歩むことができるのだ。……………

わたしは著述というものには、やはり三者(義理、考證、文章)の區別がある、とおもう。義理につとめるのが著述の立德者であり、考訂につとめるのが著述の立功者であり、文辭につとめるのが著述の立言者である。……………

むかし朱竹君(筠)先生は古文辭にたくみであった。六書に精通なさっていたわけではないが、その本意を心得させていた。王懷祖(念孫)君はもともと六書の學の専門家をもって任じていた。朱先生は『説文』に序文を附して、そこで六書の要旨を辨別せられたが、これはみな懷祖君に相談してその説を蹈襲されたものだった。僕は、先生の多くの序文のなかで、これが第一のものだ、と考えている。▽

章學誠は戴震を「心術正しからず」とのべたほか、汪中を「識力足らず」、袁枚を「不學無識」、孫星衍には「その『文集』疵病百出」など、と言いたいほうだいの毒舌を吐いた人物であった。だが戴震の弟子であった王念孫(一七四四〜一八

三三)にたいしては、その考證學を稱贊し「六書の學を以て専門名家なり」と敬意を表するのであった。まさしく章學誠は考證學を輕視せぬばかりか、一流の考證學者の業績は正當に評價したのである。

八

すでにみたごとく、袁枚は孫星衍にたいして考證學をすてて詩作にはげめ、とのべたが、章學誠はその孫星衍に宛てた手紙のなかで、「鄙人は詩を作る能わず」と告白したことがある(『章氏遺書』卷二十九「與孫淵如書」)。

それにたいして袁枚は、もちろん章學誠を眼中において述べたわけではないが、考證學者たちを皮肉って、「詩を能くせざる者、遁^{トク}れて經學を爲す」とのべたという(『文史通義』内篇五「詩話」)。そこで、袁枚が八十二歳で死去した翌年の嘉慶三年一七九八、章學誠(ときに六十一歳)は、その袁枚への批判論文「詩話」を書いて、考證學を嫌惡した袁枚を「彼れ空疏不學、漢儒を厭いて以て糟粕と爲す。豈にその言の糞土たるを知らんや。……鄙^{いん}しくして悖^{もと}れり」と攻撃する。のみならず考證學擁護の論を展開し、著作こそが第一義的なもの、考據は第二義的なものにすぎぬ、とする袁枚の主張にも反對を表明している。

考據は學問の有る(べき)所の事のみ。學問は一家ならず、考據も亦た一家ならざるなり。

鄙陋の夫(袁枚)は、學問に流別あるを知らず。人の學問を見て、目眩みて指識する能わずんば、則ちこれを概ね名づけて「考據家」と曰う。それ考據には豈に家あらんや。學問の考據あるは、猶お詩文の事實あるがごときのみ。

……

學問もて家を成せば、則ち發揮して文辭を爲し、證實して考據と爲す。人身の如きに比すれば、學問はその神智なり。文辭はその肌膚なり。考據はその骸骨なり。三者備わりて而る後にこれを著述と謂う。著述は學問に隨いて各おの自から家に名づく可くして、別に所謂の考據家と著述家はなきなり。

鄙俗の夫（袁枚）は、著述の學問に隨いて以て家に名づくを知らず、輒ち私意を以て妄りに分けて考據家、著述家と爲し、又た私心を以て妄りに議して著述家は終に考據家に勝ると爲せり。

そしてさらに、章學誠は引用の最後の部分に「自注」をつけて、「彼（袁枚）のいう考據とは類書や策括のごときものにすぎず、著述とはかれが自撰した根據のない詩文のごときものにすぎないのであって、とても一家を成すがごときものは見なせぬ」とまで斷言するのであった。

もしこの文章が、袁枚の生前に發表されていたら、袁氏は章學誠にたいして、どうのべたであろうか。興味あるところである。だが毒舌家の章學誠にしてすら、袁枚の死後にしか、かかる批判の言が吐けなかつたところに、袁枚の影響力の大きさが想像されるであろう。

ともあれ以上にみられるごとく、章學誠は學問を支えるものとして考證學の價値を積極的にみとめるとともに、著述の三要素の一つとしてもそれを評價した。乾嘉期に生きたかれはその意味において、まさしく「時代の子」であつた。とすれば、考證學は、乾嘉期の士大夫たちにとって、いかなるものとして存在したのか。

この大問題について、わたしはいまのところ回答をだすことはできない。がしかし、清代の學術と學者について、短かしながらも的をえた評價を加えた章炳麟の「清儒」〔『廬書』第十二、のち『檢論』卷四〕は、わたしに一つの示唆を與えてくれるようにおもわれる。章炳麟はいう。「（清）初、大湖の濱、蘇（州）、常（州）、松江、大倉の諸邑は、その民佚麗たり。晚明より以來、喜びて文辭を爲りて比興し、飲食會同して博依を以て相い問難す。故に劉覽を好みて紀綱なく、その流風は江の南北に徧く」と。

章炳麟によれば、江南一帯の民衆は生活が豊かであり、人びと士大夫たちはあつまつて飲酒賦詩つまり文酒の會をさかんにもよおした、そこで、博覽をきそう考證學が流行しはじめた、というのである。

汪中が亡友のため書いた文章「大清故高郵州學生賈君之銘并序」〔『述學』外篇一〕には、そうした狀況が描寫されている。

(君は)同里の李惇、王念孫と友たり。三人は皆な善く飲む。酒酣にして、君は輒に經疑を鈎折し、閒ま歌詩を以てす。まさに考證學は、當時の士大夫たちにとつて、社交のさい飲酒、詩作とともに人間的交流を圓滑にはこぶものとして、人びとの間で缺くべからざる條件の一つであつたといえるのである。くわえて、文字の獄に象徴される政治的な壓力は、清朝という異民族統治下にあつた士大夫たちに、そうした考證學の流行をよりつよく定着させるものとして作用したであらう。そしてまた乾隆三十七年一七七二に四庫全書館が開設され、その編纂作業がそうした傾向をよりいっそう強めることになつたことは、もはやいまでもない。

嘉慶三年一七九八、章學誠五十九歳のとき執筆したとされる「丙辰劄記」(『章氏遺書』外篇)に、かれは記している。

四庫館開かれてより、寒士は多く書を較して以て生を謀る。而して學問の途は、乃ち一種の多を貪り博に務めて胸に餘なき者を出す。一切の撰述において宗旨を求めず、務めて理なきの繁富を爲す。

十八世紀中葉のこの當時、ようやく寒士、すなわち貧乏士大夫、學者も、それによつて生計をたてるのが可能な文化的(經濟的)土壤と風氣ができた。科擧で及第しなくても考證學の知識と技術がありさえすれば、それを生活の手段として士大夫が生きてゆける世界が形成されたのである。だが、そうした考證學の隆盛は、章學誠のことを轉用すれば「道理なき繁榮」であつた。すでに論じたごとく、章學誠は純粹に學問をささえる考證學は肯定したが、それ以外の、學問の本旨にはかかわらぬ瑣細な事柄を争う考證學は「俗儒」のなすもの、と否定的にみていたからである。とはいへ、章學誠が科擧及第後も仕官せず(そしてまた一介の生員にすぎなかつた汪中が)苦しいながらも生活してゆけたのは、考證學が流行し考證學的技術が需要されるといふ、乾嘉時代の土壤と風氣によるものであつた。それはある意味でディレンマであつた。

章學誠はそうした土壤と風氣のなかを「君子の學は風氣を闢くことを貴びて、風氣に趨くことを貴はず」(『文史通義』外篇「淮南子洪保辨」といふ信念をもちながら生きたのである。やはりかれは、「考證學を越ゆべきこと」(11)をめざした思想家であつた。

註

(1) 姚名達の『朱筠年譜』(商務印書館、民國二十二年一九三三初版)は、乾嘉時代の學者思想家、文人たちの交流の跡を知る、もっともよい年譜の一つである。姚氏にはこのほか『邵念魯年譜』(同、一九三〇)、『劉宗周年譜』(同、一九三四)、『程伊川年譜』(同、一九三七)、『中國目錄學史』(同、一九三七)、『中國目錄學年表』(長沙商務印書館、一九四〇)さらに『史書要籍解題』『歴史研究法』など、現在においてもなおきわめて有用な書物を書いている。わたしは長年來、姚氏の履歴を知りたいとおもっていたが、『人物』一九八二年第二期にその紹介があり、以下のことを知った。すなわち、氏は江西省興國縣の人で、上海南洋公學卒。北京の清華研究院に入學し梁啓超の弟子となる。同院を終えてのち商務印書館で編集に當る。その後、復旦大學、賢南大學に教鞭をとり、一九三八年、胡先驕の招聘をうけて江西省の中正大學史學系の教授に就任。しかし一九四二年七月七日、日本軍のため殺害されたという。時に三十八歳の若さであった。なお梁啓超というとは、日本ではとくく評判が芳しくないが、わたしは思想家、あるいは教育者としては梁啓超をもっと評價してもよいようにおもう。たとえば謝國禎(一九〇一—八二)も梁啓超の弟子であるが、その近著『明末清初的學風』(人民出版社、一九八二)には、師の梁啓超を追憶する二篇の文章が収録されている。そこには、自からの全知識をわが子に伝えるがごとく教えてくれた梁啓超にたいする、謝氏の衷心からの尊敬の念があふれていて、讀む人の心をうつ。

(2) 拙稿「清代學術の側面——朱筠、邵晉涵、洪亮吉そして

章學誠」(『東方學』五十七輯、一九七九)

(3) 本田濟「袁隨園の哲學」(鈴木博士古稀記念東洋學論叢、明德出版社、一九七二)は、袁枚を「あらゆる面での享樂主義者」と定義する。袁枚については本論文から大きな示唆をえた。

(4) 梁紹壬『兩般秋雨盦隨筆』卷一「甌北控詞」收録。錢鍾書『談藝錄』(開明書局、一九三七)「各家之攻隨園」によれば、趙翼のほかに、王昶、凌廷堪、查籟、黃承吉、王衍梅、さらに俞樾、譚獻などの人びとが、程度の差こそあれ、袁枚を批判的に評したという。なお錢氏は、本書において、章學誠が袁枚にたいしてきわめて激しい批難をあげせながらも、兩者の思想はその根柢において共鳴するところがある、と指摘している(同書二六〇頁「隨園立說與實齋相契」など)。同様の主張は、郭紹虞『中國文學批評史』(新文藝出版社、一九五五、重版本)「袁枚之文論」にもみえる。なお兩書には多くの含蓄にとんだ傾聴すべき主張がみられ、きわめて有益である。

(5) 拙稿「同時代人の眼——章學誠の戴震觀」(『中國哲學史の展望と摸索』、創文社、一九七六)参照。また羅炳焯「章實齋對清代學者的譏評」(『清代學術論集』、食貨出版社、一九七八)は、同時代の學者たちにたいする章學誠の批判的見解がきわめて大量かつ詳細に紹介されていて、参考になる。さらに同書所収の「史籍考修纂的探討」は湖廣總督畢沅のもので、章學誠が編集に盡力しながら完成することなく終わった『史籍考』について、章氏の没後、浙江巡撫謝啓昆によつてなされた第二次編集工作、さらに潘錫恩による第三次編纂事業が、追跡調査される大作である。本書については日本でまだ書評が出ていない

が、當然、出てしかるべきであらう。

(6) この語は、袁枚『隨園詩話』巻七、第二十二則、また孫星衍の「隨園隨筆序」(『平津館文稿』巻下)さらに「游隨園贈袁太史七首」(『冶城遺集』)第七首目の「自注」などにみえる。「奇才」と袁枚に稱されたことは孫星衍にとって餘程うれしかったらしく、のちのちまで、袁枚に論及した文章には必ずといってよいほどこの語がみられる。

(7) 同じ内容のことは、洪榜の「戴先生行狀」(『戴震文集』中華書局、一九七四)には以下のようにみえる。「嘉定の光祿王君鳴盛、嘗て言いて曰わく、方今の學者、斷じて兩先生を推す。惠君の治經はその古を求め、戴君はその是を求む。これを究むるに、古を捨てて亦た以て是と爲すはなきなり」と。王君は博雅の君子、故に言は然か云う。

(8) 清末に「學隱」「釋戴」などを書いて、戴震を高く評價した章炳麟は、『尙書』(のち「檢論」)の「清儒」において、戴震(および皖派)の學問を以下のように評する。「凡そ戴學の數家は、條理を分析して皆な多密嚴瑣、上は古義に溯り、斷ずるに己れの律令を以てす。蘇州の諸學とは殊なる。」すなわち、戴震は自己の法則、方法論で事實を判斷、分析する、と指摘するのである。

(9) 余英時『論戴震與章學誠——清代中期學術思想史研究』(龍門書店、一九七六)の内篇第六章「戴東原與清代考證學風」では、戴震の主張を三段階に分ける。すなわち(一)一七五四年の入都、あるいは一七五七年の惠棟との面談までの時期は、義理を第一とする時期、(二)それ以後、一七六六年(四十四歳)ごろま

での十年間は、考證を重視する時期、(三)そして死までの十年は義理重視の時期、とする。しかし、わたしは本文で論じるように、戴震の心中では義理重視の立場はその生涯に一貫したものであるとしてあった、と考えたい。なお私事にわたるが、本書への拙評(『史林』六十巻第五號、一九七七)を學縁にして、わたしは一九八〇年(八一年)、イェール大學の余英時教授のもとで學ぶことができた。記して謝意を表したい。

(10) 焦循が「申戴」で引用したこの戴震臨終の語は、「王惕甫の未定稿」にみえるもので、「上元の戴衍善が記録したもの」という。だが、このことばの眞偽については諸説あったようで、『戴東原的哲學』(商務印書館、一九二七)を書いた胡適は、「一種詭譎の傳説にして最も價値なし」(同書一七頁)とのべて、これを否認する立場をとった。それにたいして、余英時教授は、このことばが實は戴衍善の父親である戴祖啓(字は敬威、一七二五—一七八三)がその息子に宛てた書簡「答衍善問經學書」(『皇朝經世文編』巻二「儒行」)に収録されているという事實を發見し、この「臨終の言」を信賴するにたるものと、と認めている(同氏前掲書一一九頁)。わたしは、戴震の思想展開からみても、この言は信賴のおけるものと考える。なお、戴祖啓のこの書簡は、戴祖啓の著『師華山房文集』巻三にも「答衍善問經學書」と題して収録されている。

(11) 島田虔次「歴史的理性批判——六經皆史の説——」(『岩波講座哲學』4、岩波書店、一九六九)

附記 本稿は昭和五十八年度文部省科學研究費による研究(「清代考證學とその思想的展開」)報告の一部である。

SHIDAFU 士大夫 (INTELLECTUALS) AND KAOZHENGXUE
考證學 (EVIDENTIAL RESEARCH) IN THE QIANJIA
乾嘉 ERA— with particular reference to Yuan
Mei 袁枚, Sun Xingyan 孫星衍, Dai Zhen 戴震
and Zhang Xuecheng 章學誠

KAWATA Teiichi

As a specific way of thinking often characterizes a particular period of history, so the evidential research of Confucian classics was prevalent in mid-18th century China. This article attempts to describe views and ideas of several important scholars concerning evidential research.

Yuan Mei, then the most epicurean of scholars, believed that the study of evidential research would make it impossible for scholars to compose poetry. (In pre-modern China, the composition of poetry had been recognized as the most valuable accomplishment for the intellectual class.) But, Sun Xingyan, whom Yuan called a poet of genius when Sun was young and he helped to make Sun's debut in academic circles, refused to write poetry and pursued the study of evidential research.

Hui Dong 惠棟, Qian Daxin 錢大昕 and Wang Mingsheng 王鳴盛, all leaders of the Wu school 吳派, believed that everything old is certainly true and everything from the Han dynasty is good 凡古必真, 凡漢皆好, and they positively pursued the study of evidential research. Dai Zhen, the famous and significant leader of the Wan school 皖派, was considered a scholar of evidential research by his contemporaries, but in his own opinion he took yilzhixue 義理之學 (philosophy) more seriously than the study of evidential research. Although Zhang Xuecheng of the Zhedong school 浙東學派, was not famous then, he is now popular as a "unique thinker" who established a peculiar historical philosophy, recognized the value of evidential research, he strongly opposed the idea that every scholar should be engaged in the study of evidential research.

Thus, despite their different opinions about evidential research, the fact remains that all of these scholars, except for Yuan Mei, made their living by the study of evidential research.